

豊田珍彦『豊橋地方空襲日誌』を読む(9)

阿部 聖

Introduction of the Diary of Air-raid in Toyohashi Area during the Pacific War Written by Uzuhiko Toyota, Part 9

Sei Abe

要約：本号では、4月8日から4月30日までの日誌を読み進めていく。4月12日からは、日誌も第5冊に入る。3月末から沖縄支援のため九州地域の航空基地の爆撃が連日のように行われた。同じく4月の前半には、関門海峡や瀬戸内海への機雷投下も行われた。こうした作戦の合間を縫うように航空機関連工場への爆撃や大都市への爆撃も行われ、「この地方としては、たまに一機ずつの侵入を見る程度」ではあったが、状況は日々深刻となりつつあった。4月30日には豊橋も爆撃され、予備士官学校（現愛知大学豊橋校舎）構内にも着弾し、死者を出した。

キーワード：沖縄支援、機雷投下、特攻基地爆撃、P-51、4月15日、4月30日

<前号からつづく>

四月八日

(159) 大詔奉戴日のけふ、朝から曇り出した大ぞらを震はして警戒警報のサイレンが鳴り出した。時は〇時十分、恐らく偵察であらう。志摩半島方面から侵入した敵一機が、津の沖を通つて名古屋を侵し、それより東進、岡崎を経てこちらにやつてくるらしい。来るか、敵機を待ち構えたが遂に姿を見せず、遙か北方を通つて浜名湖方面に出た。ここから洋上に脱去するかと見ると、そのまま東進し東部軍管内に侵入したらしく、僅かに十分で、〇時三十分、この警報も解除されて平常に復した。

とになっている。豊橋地域で警戒警報の対象になったのは、WSM355（東京）と考えられる。その他のB-29は、いずれも九州および四国地域を目標としていて、豊橋地域では警報は発令されなかった。

『朝日新聞』によれば、「B29二機は八日午前零時四十分頃より約一時間にわたり一機ずつ豊後水道附近および山口県下に行動、佐伯附近に若干投弾した」（4月9日付）、「B29各一機は八日午後十一時ころ高知県より侵入、姫路、岡山を偵察、同じく十一時すぎ高知県より侵入、岡山附近に投弾のの後、高松を経て脱去」（4月10日付）した。

[解説] 対米戦争の開戦の詔勅にちなんで「大詔奉戴日」のこの日、12時10分に警戒警報が発令された。米軍資料（第41表）によれば、気象観測爆撃機WSM354～356の3機、写真偵察機3PRM130～131の2機、レーダースコープ写真任務機313RSM6、1機、計6機が飛来したこ

四月十二日

(160) 二三日敵機の襲来を見ぬままに雨が降つた。桜が散つた。婆さんはまだ工合が悪く寝たままだが、少しづつ食欲が出て来た。今朝も四時に起きて朝餉の支度にかかり、婆さんにもたべさせ、自分もたべ終つた五時四十分、警戒警報のサイレンが鳴り

第41表：1945年4月8日～12日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻 (マリアナ時間)	出撃時刻 (日本時間)	到着予想時刻 (日本時間)	帰還時刻 (マリアナ時間)	目標 (地域)
4月8日	WSM354	071832K	071732	080032	G080930K	佐伯海軍基地
	3PRM130	[080145K]	[080045]	[080745]	G081545K	九州
	3PRM131	[080510K]	[080410]	[081140]	G181910K	九州-呉
	WSM355	[080520K]	[080420]	[081120]	S081920K	東京
	WSM356	[080630K]	[080530]	[081230]	G082030K	佐世保
4月9日	313RSM6	081658K	081558	082258	T090737K	明石-玉島
	WSM357	081808K	081708	090008	G090840K	佐伯
	WSM358	[090534K]	[090434]	[091134]	S091934K	清水
4月10日	WSM359	090615K	090515	091215	G092036K	済州島
	WSM360	091810K	091710	100010	G100819K	神戸
	WSM361	100615K	100515	101215	G102025K	済州島
4月11日	WSM262	100618K	100518	101218	G101950K	島田飛行場
	WSM363	102311K	102211	110511	S111225K	神戸
	3PRM132	[110045K]	[102345]	[110645]	S111445K	九州-広島
	3PRM133	[110300K]	[110200]	[110900]	G111700K	九州-関門海峡
	WSM364	[110515K]	[110415]	[111115]	G111915K	沼津
4月12日	WSM365	[110555K]	[110455]	[111155]	G111955K	大槻飛行場
	WSM366	[112340K]	[112240]	[120540]	G121340K	各務ヶ原
	WSM367	120604K	120504	121204	S122010K	呉海軍工廠
	WSM368	[120730K]	[120630]	[121330]	G122130K	玉島
	WSM369	122307K	122207	120507	G121645K	玉島
	3PRM134	120200K	120100	120800	G121706K	名古屋-立川-東京
	3PRM135	120215K	120115	120815	G130115K	九州飛行場
3PRM136	120600K	120500	121200		東京-名古屋-立川	

注：Kはマリアナ時間を表し、日本時間はK マイナス1時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に7時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は、帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は [] に入れて示してある。

(出所)「作戦要約」より作成。

出した。

情報によると、琵琶湖方面からこちらに向ふ敵一機があるといふ。六時には警報の解除を見た。其後この敵機は鳳来寺山より浜名湖北方に出、浜松の東方から洋上に脱去したといふ。どこにも投弾した模様もない処を見ると例の偵察に違いあるまい。

[解説] 日誌は4月9日から11日まで記載がない。「二三日敵機の襲来を見」なかったからである。米軍資料(第41表)によれば、9日は気象観測爆撃機 WSM357~359の3機、10日にはWSM360~362の3機、11日にはWSM363~365の3機および3PRM132~133の2機、計5機が来襲したことになる。

これに対して、『朝日新聞』は、9日には「午前零時すぎ高知県より侵入、宇和島を経て大分

県佐伯附近に投弾、さらに日本海に出た後反転南下し豊後水道より脱去」(4月10日付)、「正午頃B29一機は静岡県東部に投弾し、関東地方を経て脱去した。なほ同日午後十一時半頃四国方面からB29一機近畿地方に侵入」(4月11日付)した。10日には「午前零時頃から三十分互りB29各一機づつ六回に互り四国西部から関門海峡附近に行動のち脱去した」(4月11日付)、11日は「午前五時ごろB29一機が高知附近から侵入、神戸に若干の投弾をして同六時過ぎ脱去した」と報道した。

12日は、まず、早い朝食を終えた「五時四十分、警戒警報のサイレン」が鳴ったが、20分後には警報解除となった。

空襲日誌の第四冊は、ここで終了している。第五冊がやはり4月12日から記載されているた

め、詳しい説明はそちらに譲ることにする。

空襲日誌 第五冊

[解説] 空襲日誌も第五冊目となった。第五冊は再び4月12日から始まっている。寒く長い冬も過ぎていつのまにか春を迎え、「桜さく我が日の本へ見物ながらか」とB-29の来襲を伝えたのは4月5日のことであったので、4月12日といえば、桜の花びらもほぼ散ってしまった頃であろうか。米軍は、4月1日に沖縄本島へ上陸し、4月13日には本島北部地域をほぼ制圧し、主力部隊は首里をめざしていた。すでに日本軍の主要な戦法は特攻に依存するしかない状態であったが、4月7日には、沖縄戦に向けて出撃した戦艦大和をはじめとする水上特攻部隊が撃沈された。こうして沖縄は完全に孤立する一方で、米軍の本土上陸の可能性も現実性をおびる状況を迎えたといつてよい。また、米軍は特攻の出撃基地となっていた九州をはじめとする飛行場への爆撃を連日のように行った。さらに7日からは日本本土の大規模爆撃に際して、硫黄島に進出した第七戦闘機隊のP-51がB-29の護衛として参加する機会が多くなった。この後の日誌の記述に「戦爆連合」とあるのは、この状況を言い表すことばとなっている。

四月十二日

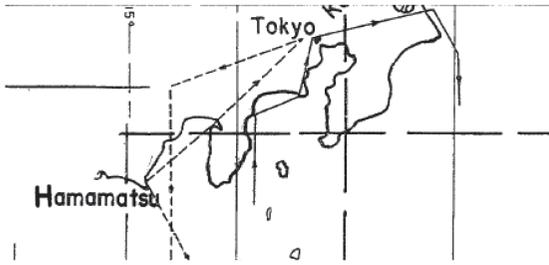
(161) 所用で町内会長を訪問用談してゐると、午前八時少し前、突然、警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報をきけば、小笠原諸島方面を北上する敵大型機約百機があり、また硫黄島に進出してゐる敵戦闘機百五十機も参加が予想されるといふ。いよいよ敵も戦爆連合でやってくる時が来た。よし来るなら来いと待ち受けた所、どうやらけふは東部軍管区をめざしてゐるらしい。十時頃になると、敵は御前崎附近に集結を初めた。その一部、二十機が浜松東方を西進するので、十時半、愛知県にも空襲警報が発令されたが、これは敵の巡回する一部を見誤つたもので事実西進する敵機はなかつた。かくて集結を終つた敵は、次々十機二十機と編隊を

くんでは東北に進み東部軍管内へ侵入して行つたが、十一時半頃からまたまた御前崎方面へ引返して来てそこから南方洋上へ脱去してゆく。これより先き、十一時五分、敵襲来の恐れなしと見てこの地方の空襲警報は解除されたが、更に十二時十分、警戒警報も解除され平常に復した。

(162) 前のが解除されて間もない十二時五分、志摩半島めざして北上する敵三目標ありとの情報に緊張も解かれず待機すると、〇時半、警戒警報が発令された。何でもその後続々増加して、十数目標があるらしい。午前に東部軍管内を襲ひ、午后に名古屋を襲ふのも、敵の戦力から見れば異とするに足らぬと勇躍待機した処、いつ迄たつても合合で旋回するのみで侵入して来ない。よくよく調べて見ると、何のことだ、敵めが少数機で錫箔を撒き、電波探知機に妨害を加へたものと分つた。うまうまと一杯喰された形ち。癪にさはるけれども事実やられたのだから仕方がない。そんなことで二時半、この馬鹿馬鹿しい警戒警報も解除になつた。お蔭でけふ一日仕事の上に大番狂はせ。どうか軍部もしつかりして貰ひたいものだ。

[解説] 4月12日は、5時40分につづいて、「午前八時少し前」に2度目の警戒警報が発令された。情報によれば、「小笠原諸島方面を北上する敵大型機約百機」に対するものであった。さらにそれらの大型機は10時頃には「御前崎附近に結集」、やがて空襲警報が発令されたが、「愛知県に襲来の恐れなしと見て」空襲警報は解除、警戒警報も12時10分に解除された。その直後の12時30分に3度目の警戒警報が発令されたが、「少数機で錫箔を撒き、電波探知機に妨害を加へたもの」と分かつた。

この日、作戦任務 No.63, 64, 65, 66が実施された(前号第37表)。爆撃目標は、作戦任務 No.63は中島飛行機武蔵製作所、同じく64は保土ヶ谷化学工業会社、65は郡山化学工業会社で、この2目標はいずれも福島県郡山にあった。66は関門海峡水域を対象とする機雷投下である。作戦任務63~65の爆弾投下は、ほぼ同時刻に行



第54図：1945年4月7日の作戦任務No.63の飛行コース（破線）

（出所）「作戦任務報告書」No.58 & No.63.

われているが、飛行コースから考えて、日誌の警戒警報の対象になったのは、作戦任務No.63の中島飛行機武蔵製作所に対する大規模爆撃であった。この作戦では73航空団114機が出撃し、第54図の破線の飛行コース、すなわち相模湾から上陸し、富士山をIPとして目標に向かった。こうして日本時間の11時08分～21分にかけて、高度12,000～17,500フィートから2,000lb一般目的弾、M-66を第1目標に対して94機が490発を投下した。また、11機が三菱重工静岡発動機製作所を爆撃した。この結果、4月7日の爆撃の結果と合わせた損害は、中島飛行機武蔵製作所については、建物総面積の48.2%（それ以前を合計すると62.6%）を破壊、静岡発動機製作所については建物総面積の86%を破壊した¹⁾。復路は、爆撃後、南西に進んで御前崎を目印に洋上へ抜けた。ちなみに、第54図の実線は、4月7日の中島飛行機武蔵製作所爆撃の際の飛行コースである（前号、第53図参照）。

12日の爆撃では、7日について硫黄島のだい第VII戦闘機集団のP-51が中島飛行機武蔵製作所に向かうB-29の護衛を行った。この日は作戦任務No.64と66の福島へ向かう部隊が55分早く出撃して、日本軍機に警戒態勢をとらせて東京地域から引き離す作戦をとった²⁾。

少数機についてみると、12日には気象観測爆撃機WSM366～368の3機、写真偵察機3PRM134

～136の3機の計6機が来襲している。これらについては、警戒警報のかたちで日誌の記述には現れていない。『朝日新聞』は「大挙来襲の前後八次にわたり各一機づつ東部、東海、中部および西部に行動し、その一機は午前六時頃岐阜に他の一機は同九時半頃静岡および下田附近に投弾した」（4月13日付）、「十二日午後十一時頃房総半島南方に接近したが、本土に侵入することなく脱去した」（4月14日付）と報じた。

四月十三日

(163) 午前九時十分、西の畑に仕事してゐると警戒警報のサイレンが鳴り出した。すぐに合図を打つて組内に知らせる。情報によると、どこから侵入したのか北陸地方に敵一機が侵入し行動中だといふ。こやつしばらくその地方をうろついた挙句、東部軍管内へ侵入したので三四十分でこの発令は解除された。

【解説】午前9時10分に警戒警報が発令された。米軍資料（第42表）によれば、4月13日には気象観測爆撃機WSM369、1機と3PRM138～142の5機、計6機が来襲したことになる。

『朝日新聞』（4月14日付）は「十三日午前一時から同じく二時頃のあいだにB29各一機は三回に互り豊後水道から侵入・・・同じく午前一時四十分一機は四国西部から侵入し、中国近畿地方を偵察した・・・同九時四十分頃同じく一機は四国西部から山口県に侵入偵察の後脱去した」、これと一部重複すると思われるが、さらに「B29各一機は十三日午前八時半から午後三時頃までの間関東地方に二回、瀬戸内海方面に二回、五島列島および裏日本に二回、四国から裏日本に一回、計七回にわたり来襲、帝都西方に一部投弾した」などと報じた。

日誌の警報の対象になったのは「北陸地方に敵一機が侵入し行動中」という記述を考慮すると3PRM138または139のいずれかであろう。

1) 「作戦任務報告書」No.58 & 63。

2) 同上。

第42表：1945年4月13日～19日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻 (マリアナ時間)	出撃時刻 (日本時間)	到着予想時刻 (日本時間)	帰還時刻 (マリアナ時間)	目標 (地域)
4月13日	3PRM138	130158K	130058	130758	G131730K	舞鶴-新潟
	3PRM139	130216K	130116	130816	G131716K	本州北部沿岸
	3PRM140	130233K	130133	130833	G131740K	静岡-太田-立川-郡山
	3PRM141	130230K	130130	130830	G132050K	九州-呉
	3PRM142	131181K	131031	131731	G140910K	東京
4月14日	WSM370	132017K	131917	140217	G132005K	濟州島
	WSM371	132310K	132210	140510	G132230K	立川
	WSM372	132310K	132210	140510	S140029K	神戸
	WSM373	[140815]	[140715]	[141415]	G142215K	佐伯海軍基地
	WSM374	[140035]	[132335]	[140635]	I141435K	立川陸軍航空工廠
	3PRM143	[140255]	[140155]	[140855]	G141655K	東京市街地
4月15日	73PSM2	141915K	141815	150115	S150845K	東京 (中島飛行機工場)
	WSM375	142251K	142151	150451	G151314K	豊橋
	3PRM144	150223K	150123	150823	G151625K	浜松-東京
	3PRM145	150407K	150307	151007	G150725K	東京
	WSM376	150624K	150524	151224	G152130K	朝鮮海峡
	WSM377	150600K	150500	151200	S151845K	神戸
	3PRM146	151635K	151535	152235	G160705K	川崎-東京
	WSM378	152300K	152200	160500	G161312K	岩国飛行場
4月16日	3PRM147	160203K	160103	160803	G162018K	九州
	WSM379	[160424K]	[160324]	[161024]	S161824K	名古屋
	WSM380	160553K	160453	161153	G161939K	濟州島
	WSM381	162302K	162202	170502	G171232K	厚狭火薬工場
4月17日	WSM382	[170206K]	[170106]	[170806]	G171606K	矢田部飛行場
	3PRM148	170244K	170144	170844	G172258K	東京-横須賀-静岡
	3PRM149	[170208K]	[170108]	[170808]	G171608K	東京
	3PRM150	[170240K]	[170140]	[170840]	G171640K	東京
	WSM383	[170500K]	[170400]	[180500]	G171900K	濟州島
4月18日	3PRM151	172315K	172215	180506	I181315K	九州
	WSM384	172317K	172217	180517	G181325K	名古屋
	WSM385	[180401K]	[180301]	[181001]	I181801K	佐伯
	WSM386	[180603K]	[180503]	[181203]	G182003K	東京 (中島飛行機)
4月19日	73PSM3	182115K	182015	190315	S191053K	名古屋
	WSM387	182306K	182206	190506	S191623K	玉島三菱航空機工場
	73NM2	[190441K]	[190341]	[191041]	S191841K	厚木飛行場
	WSM388	[190734K]	[190634]	[191334]	G192134K	佐世保海軍基地
	WSM389	[190734K]	[190634]	[191334]	S192134K	神戸

注：Kはマリアナ時間を表し，日本時間はK マイナス1時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に7時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は，帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は [] に入れて示してある。

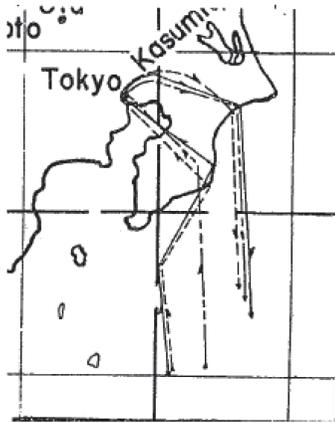
(出所)「作戦要約」より作成。

13日から14日にかけて，日本時間13日22時57分から14日02時36分には作戦任務 No.67が実施され，第73，313，314の3航空団348機が出撃して高度6,750～11,000フィートから第1目標である東京陸軍造兵廠地域に500lb集束焼夷弾，

E-46を9,077発 (1,815.4トン)，100lb焼夷弾M-47A2を6,448発 (222.3トン)，500lb一般目的の弾，M-64を319発 (79.9トン) 投下するなどした³⁾。

飛行コースは，第55図に示すように，勝浦附

3) 「作戦任務報告書」No.67。



第55図：4月13-14日の飛行コース

(出所)「作戦任務報告書」No.67.

近から上陸半島を横断して市原附近から東京湾を横切って浦安附近から十条，赤羽方面へ向かった。爆撃後，右旋回して銚子の南から洋上へ出た。

この爆撃で東京北部の広範な地域に損害を与え，新たな焼失地は10.7平方マイル（27.7平方キロ）におよび，番号付けされた7工場が損害を受けた。

15日の日誌にあるように「これが為め宮城，大宮御所，赤坂離宮に火災発生せる外，畏くも明治神宮本殿拝殿」は焼失した⁴⁾。

実は，後述するように，この日の爆撃で豊島区も爆撃の被害を受け，同地域で暮らしていた日誌の筆者の娘である勝代は家族とともに空襲のなかを逃げまわっていたのである。

四月十五日

(164) ルーズベルトめが脳溢血で死におつた。それも高松宮様が陛下の御名代として神宮御参拝になりそれが発表された十二日のことだ。

あの獣めが死んだとて戦争が中止になる筈がない。現にその翌十三日夜から十四日の暁にかけて，B29百七十機が帝都に侵入し市街地を無差別爆撃して居るが，これが為め宮城，大宮御所，赤坂離宮に火災

発生せる外，畏くも明治神宮本殿拝殿の炎上を見た。そんなことで夢円らかでない今朝午前一時過ぎ，警戒警報のサイレンに夢破られてハネ起きた。月もない真暗な夜空に星のみが光つてゐる。次々に鳴るサイレンの未だ鳴り終らないうちにラジオで警戒警報の解除が伝へられ，一方では警報の合図をうつの一方では解除の合図をうつといふ始末。敵機の動静も何も確かめず眠いままにまた寝て仕舞つた。

午前六時半，折柄，朝食を終つて後仕末しやうと庭へ降りたとたん，聞き馴れない爆音につづいて爆弾の炸裂音が南方から聞へてきた。素破敵機と表へ飛び出して見たが，敵機の行情も炸裂した場所もここからは分らない。間もなく通りがかりの人から向山の方で黒煙りが上つたからまたやられたらしいときいた。勿論，情報もなければ警報も出てゐない。どこでも慌ててスイッチを入れるとこの時情報で敵一機がこの地方で行動中なることが分つた。間もなくこやつ浜松の東方から南方洋上に脱去したといふ。今度も油断してゐたためにまたやられた。こんなことで果してよいだらうか。

午前五時半室戸岬より侵入，岡山，京都，宇治山田を経て豊橋に投弾，浜名湖方面から洋上に脱去

(165) 九時丁度，畑で仕事してゐると，またまた警戒警報のサイレンが鳴り出したので直ちに太鼓を打つて組内へ知らせる。

情報によると志摩半島から侵入した敵一機，四日市附近を北進中だといふ。そのうちに針路を東北にかへた。次の情報で渥美半島の上空を東進中だといふ。不図仰ひで南天を見ると，例のB29が四条の雲を曳いて頭上めがけ迫らんとしてゐる。少し慌てて待避の合図を打つた。家にはもう十日近くも病気で寝てゐる婆さんがあり，空襲だとどうすることも出来ぬ。爆弾でも落ちたらそれ迄と覚悟を極め睨みつけてゐると，真上をやや左にそれて浜松方面へ向つてゆく。ほつとした気持になると間もなく，警報は解除され敵機は尚も東へ東へと進んでゆくらし

4)『朝日新聞』1945年4月15日付。

い。

今朝の爆弾は向山でなく、小池町の小池神社近くの東海道線路を狙い急降下して投弾したのださうだ。そして線路に大穴をあけその穴に客車の機関車が飛び込んだ結果、死者何名かを出したといふ。近藤寿市郎市長の宅はそこから余り距れてゐないのでさぞびっくりせられたことだらう。

九時半頃紀伊半島より侵入、津、静岡、小田原、帝都を偵察の後十時半頃脱去

〔解説〕日本で、12日のルーズベルトの死が報じられたのは、4月14日のことで、『朝日新聞』にも「ルーズベルト急死 新大統領にトルーマン昇格」の記事が見える。13日から14日にかけての大規模爆撃の後、少数機では気象観測爆撃機WSM370～374の5機、写真偵察機3PRM143, 1機、計6機が来襲したことになる。ただ、日誌は14日の記載がない。また、『朝日新聞』にも少数機に関する記事がない。

15日には米軍資料によれば、レーダースコープ写真撮影任務の73RSM2, 1機、WSM375～377の3機、3PRM144～146の3機、計7機が来襲している。日誌は、「午前一時過ぎ、警戒警報」が発令されたが、「次々に鳴るサイレンの未だ鳴り終らないうちにラジオで警戒警報の解除が伝」えられた。そして午前6時30分に「聞き馴れない爆音につづいて爆弾の炸裂音が」きこえた。この爆弾は「小池町の小池神社（第56図□のマーク）近くの東海道線路」に投下され、「線路に大穴をあけその穴に客車の機関車が飛び込んだ結果、死者何名かを出」した。豊橋市戦災復興誌編纂委員会編（1958）『豊橋市戦災復興誌』によれば小池町、柳生町に爆弾が投下され8名が死亡した。米軍資料（第42表）によれば、1時過ぎの警戒警報は、73RSM2と思われる。また豊橋爆弾を投下したのは、WSM375（豊橋）で、500lb一般目的弾、M-64であった。着弾地点は、「豊川用水の生みの親」ともいわ



第56図：小池神社とその周辺の地図

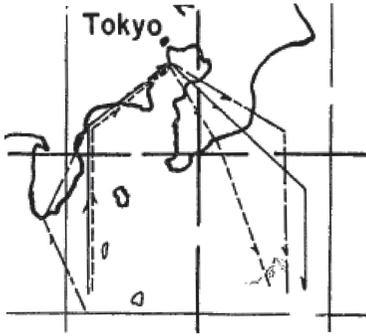
（出所）『最新豊橋市街地図』1939年より。

れ、1941年4月18日から1945年4月17日まで豊橋市長を務めた近藤寿一郎⁵⁾宅の近くだった。また、名古屋空襲を記録する会（1985）は、投下弾は8発（内2発は不発）、被弾地は小池町角田および原下で、爆弾1発により「省線東海道線小松原踏切（豊橋市柳生橋東方）附近被弾進行中ノ列車爆風ニ依リ機関車脱線セルモ客車ニ被害ナシ」としている⁶⁾。この日はさらに「九時丁度」に3度目の警戒警報が発令されたが、ことなきを得た。

『朝日新聞』は「十五日午前零時半四次に互り本土に來襲、第一次は午前零時半頃御前崎より侵入、山梨地区および帝都西方を偵察の後脱去、第二次は午前一時半頃同じく御前崎より侵入、帝都西方を偵察の後脱去、いづれも投弾なし、又同じく五時半頃室戸岬より侵入せる一機は岡山、京都、宇治山田を経て豊橋に若干の爆弾を投弾せる後脱去、また午前九時頃紀伊半島より侵入せる一機は津、静岡、沼津、小田原、帝都を偵察」と報じた。

5) 豊橋市 HP (<http://www.city.toyohashi.lg.jp/8307.htm>)。

6) 原資料は、愛知県防空本部「愛知県地区空襲被害概況蒐録（四）」12頁および33頁。



第57図：4月15日の作戦任務 No.69の飛行コース
(出所)「作戦任務報告書」No.69.

15日には、一方で、作戦任務 No.68と69が実施された。作戦任務 No.68は、爆撃目標が川崎市街地で第313および314航空団合わせて219機が出撃し、日本時間20時43分～翌16日0時56分、高度6,420～10,100フィートから第1目標に対して194機が500lb 集束焼夷弾、E-46, 3,823発(764.6トン)、100lb 焼夷爆弾、M-47A2, 8,925発(307.8トン)、500lb 一般目的弾、M-64, 72発(18トン)、500lb 集束破砕弾、T4E4, 98発(19.6トン)などが投下された。

作戦任務 No.69は、目標が東京市街地で第73航空団118機が作戦任務 No.68とほぼ同時刻に、ほぼ同高度で爆撃した。投下されたのはE-46, 2,172発(434.3トン)、M-47A2, 9,280発(320トン)、M-64, 58発などであった。

2つの作戦任務によって川崎、横浜、南東京の焼失地域は9.6平方マイル(24.9平方キロ)におよび、番号付けされた25の産業目標が損害を受けた⁷⁾。

飛行コースは、第57図の通りである。-----は第313、-----は第314、———は第73航空団のものである。いずれも熱海附近をIPとして目標に向かっており、爆撃後に右旋回して東京湾、房総半島を横断して太平洋に抜けている。

四月十六日

(166) 敵か味方か・・・(不明)・・・。昨日の不意

打ちに懲りて人々の神経は鋭くなつてゐる。間もなく夜空に響く警戒警報のサイレン。慌ててラジオをかけると敵一機が豊橋附近を北進中だといふ。「そんなら今のは敵であつたか」笑談ではない。またまた不意を衝かれた客だ。でも投弾もせられなかつたのが何より。然し、こうなつては油断も隙もあつたものでない。時計を見ると十二時へ十分前。すぐ出て合図をうちながら組を一巡する。寒くないので、真冬のことを思へば、どれ程楽なことか分らない。この畜生は鳳来寺山から南信地方に侵入していつたが、その頃、浜名湖附近から別の一機が侵入し北東静岡方面へ飛び去つたので〇時二十分、この警報も解除になつた。

(167) 昨夜十一時から本晩にかけ敵約二百機が京浜地方に来襲し、為に大火災が発生したが朝までには大略消しとめたさうだ。成程敵が呼号する如く空襲はいよいよ熾烈化して来た。うつかりしてゐては食事をする隙もないことになると十一時を少しすぎると昼食にかかり、箸を置いた二十五分果して晴れ渡る大そらに警戒警報のサイレンが鳴り出した。そこそと飛び出して合図の太鼓を打つ。情報によると志摩半島から侵入した敵一機、松坂、津、四日市と北上して来たが、ここで旋回、名古屋を見捨てて伊賀上野に出、大津附近でまたまた旋回、京坂に去つたので零時五分警報は解除となつた。この敵は京都附近に投弾したらしく再び伊賀上野に戻り東南進、十二時十七分、志摩半島を出はづれ洋上に脱去したといふ。

[解説] 4月16日の日誌では、内容的には15日の0時10分前と思われるが警戒警報の発令となつた。ほぼ同時刻に別の一機が侵入したが、0時20分に警報解除となつた。さらに、11時25分に警戒警報が発令された。日誌の筆者はいずれも「合図の太鼓を打つ」。この警報は翌17日0時17分に解除となつた。

米軍資料(第42表)によれば、この日、気象観測爆撃機 WSM138～140の3機と写真偵察機

7)「作戦任務報告書」No.68 & 69。原田良次(1973)下、によれば、死者124人であった(49頁)。

3PRM147, 1機の計4機が来襲したことになる。『朝日新聞』に少数機の記事もなく、警報と米軍機の対応関係は不明である。

四月十七日

(168) 午前八時三十分、春かすみ立ち込める大空に警戒警報のサイレンが鳴り出した。何だか大挙襲来のやうな予感に情報をきくと、敵二機が畿内に侵入し東進中だといふ。二機許りなら糞でも喰へた。その内一機は上野附近から南に向をかへ、一機は東に進み、その南に向つたやつは津から宇治山田辺までいつてまた北上、四日市附近から東進、伊勢湾の北部から岡崎、秋葉山を経て伊豆伊東附近から南方洋上に脱去し、一方関ヶ原を東進した敵一機は名古屋に侵入することなく、岐阜県から長野県に侵入していつた。こうして待ち構えた敵機も我が上空に顕ることなく約三十分で警報の解除を見た。

(169) 午後一時二十分、またまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報によれば志摩半島をめざし北上してきた敵一機、宇治山田の附近から東に折れ渥美半島を経て豊橋の上空をめざしてゐるといふ。花曇りの空はおぼろに霞んで南天に爆音は聞へるが敵機の姿はみるべくもない。数分の後にはもう浜松附近を東進し静岡をめざしてゐるといふ。そんな訳で凡二十分許りでこの警報は解除された。

〔解説〕 17日は8時30分に警戒警報が発令された。

2機が畿内に侵入して、一機は四日市附近から東進して岡崎から伊豆へ抜け、一機は岐阜から長野へと進んで、9時には警報解除となった。13時20に再び警戒警報が発令となったが、数分後には浜松を東進しているとの情報で、警報も13時40分ころ解除となった。

米軍資料(第42表)によれば、この日WSM381~382の2機、3PRM148~150の3機、計5機が来襲したことになる。日誌の警戒警報の対象になったのは、8時30の2機は3PRM149と150(いずれも東京)と考えられるが、13時20分については不明である。『朝日新聞』は「十七日午前五時頃B29一機は豊後水道より侵

入、佐伯、国東半島、下関方面偵察行動後宇部市西方海面に爆弾二個投下、同五時半過ぎほば侵入経路より脱去」と報じたのみであった。

四月十八日

(170) 今し方起きた許りの午前五時十分、警戒警報のサイレンが鳴る。立ちいでて見れば空は晴れたれど、野も山も春霞たち込めて朧にかすんでゐる。情報によると、奈良県の中部から鈴鹿山を超え名古屋をめざしてやつて来た敵は、何を思い出してかその手前で旋回を初めたが、次いで北進を始め、高山から北陸地方へ行つて仕舞つた。いづれこちらに戻つてくるだらうが、戻りまで待ても居られず、六時少し前、この警報も解除された。

× × ×

この敵め、北陸地方に行動してゐたがやがて反転南進してきたので、六時三十分、又々警戒警報の発令を見た。こやつ琵琶湖北端から名古屋にやつて来て通過、同じ四十三分、伊勢湾口から南方洋上に脱去したので、この二度目の警報もあつさり解除を見た。

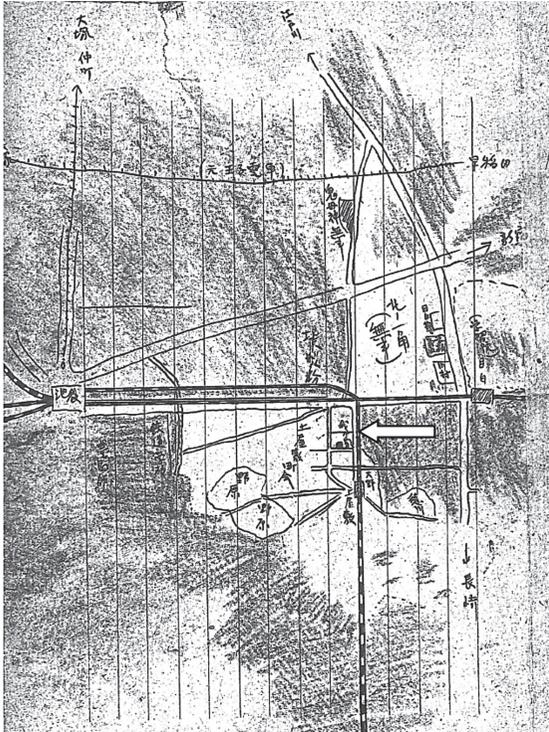
× × ×

この警報解除があつて一二分の後、市のサイレンが鳴り出した。然し、敵機来襲でもなく何かの間違いらしいので放置しておくことにした。

〔解説〕 18日は5時10分に警戒警報が発令された。

この機は奈良県から名古屋手前で北進して北陸へ進んで、5時43分に警報解除となった。6時30分に再び警戒警報が発令されるが、これは先の機が戻ってきたものらしく、間もなく洋上に去り、警報は6時43分解除となった。

米軍資料によれば、この日は気象観測爆撃機WSM383~386の4機と写真偵察機3PRM151, 1機、計5機が来襲したことになる。日誌の警戒警報の対象になったのは、WSM384(名古屋)である。名古屋空襲を記録する会(1985)によれば、同機は「名古屋港内」に爆弾を投下したが、「海中ニ落下被害ナシ」(21頁)であった。



第58図：勝代からの手紙に添えられた目白付近の焼失図

けふきた子供たちのたより（四月十九日出）

父も母も丈夫で居ますか。私達もお蔭で今の所無事です。去る十三日の空襲には一時は駄目とあきらめまして、四方火に取まかれ親子三人であちらこちらにげ廻り、朝までにやつと落付きました。おかげで家はやけなくて助かりました。同封の図のやうに今度の豊島区もひどいものです。おいそさんは十二日に鳥取の方へ疎開したあの明けの日で運がよくなされました。

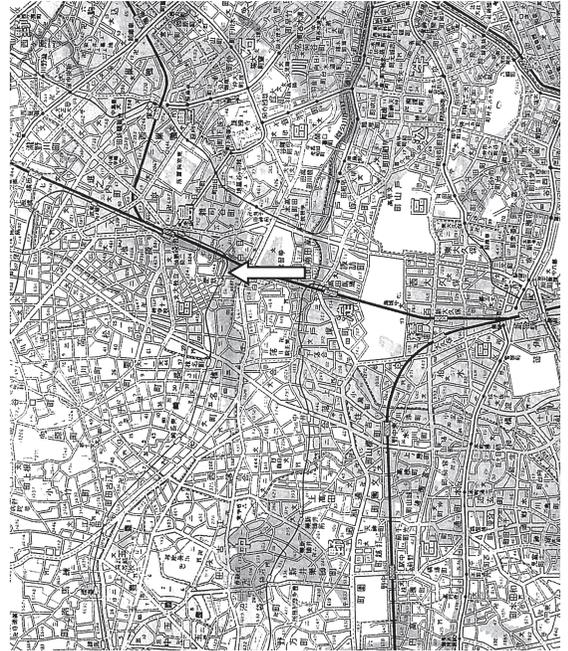
人の話をきくと豊橋へも爆弾投下したそうです。何事もなかつたですか。今の上り屋敷は罹災者で一ぱいです。

では父母共元気で、さようなら。

折を見て便り下さい。

かつよ

[解説] 4月18日と19日の日誌の間に、娘の勝代から送られたと思われる便せんに書かれた手紙



第59図：豊島区の戦災消失図

(出所)『東京都35区分地図帖－戦災焼失区域表示』
日本地図株式会社、1985年より。

が添付されている。いつ届いたのかは不明であるが「四月十九日出」とある。この手紙は「十三日の空襲には一時は駄目とあきらめ」たこと、「四方火に取まかれ親子三人であちらこちらにげ廻り」ったこと、運よく「家はやけな」かったと報告している。しかも手書きの地図が同封されており、池袋から目白の間の焼失地域を鉛筆で黒くぬり、焼失を免れた地域を白く残している。地図の「上屋敷町会」と書かれた右側に「我が家」(↔) (第58図)と記してある。これを「戦災焼失地域」の豊島区周辺の焼失地域(第59図)を見て、勝代が描いた地図と比較するときその正確さに驚かされる。蛙の子は蛙というべきか。しかも焼失図をみてもわかるように、焼け残った家は、奇跡的に焼失を免れた地域の一角にあった。

手紙には父娘共通の知り合いと思われる「おいそさん」の奇跡的な無事について述べ、「豊橋へも爆弾投下」の情報を得て、両親の安否を気遣っている。そして、最後に「上り屋敷は罹

「災者で一ぱいです」と結んでいる。この時期に東京で投函されたと思われる手紙が豊橋に無事に届いたことは驚きである。そして何よりも、この手紙は自ら被災しながら、父母に無事を知らせるのに、必要と思われる事実のみをたんと記して、ある意味で感動的ですからある。

四月十九日

(172) 二時をうつを夢幻にきいて暫くすると、警戒警報のサイレンが鳴り出した。ソラこそ敵機とはね起きて合図をうつ。情報をきけば敵は三目標で奈良県方面からこちらに向つてゐるらしい。例の一機や二機と違つてこちらもそれだけ緊張する。

間もなく名古屋に侵入した。岡崎地方を東南進中だとの情報にいよいよ来たなと耳を傾けると例の爆音が近づいてくる。待避の合図が鳴り出した。これは第一目標の一番機で、ずつと北よりを通過、続いて第二目標が南と真上と北寄りを雁行して東南さしてゆくらしい爆音が聞へ、慌しい待避の合図がそこで鳴つたが、これも投弾することなく通過、第三目標は市の上空に接近することなく浜名湖附近から脱去したさうで三時十分この警戒警報も事故なく解除となつた。

[解説] 19日は、2時に警戒警報の発令となつた。

来襲したB-29は3機で「間もなく名古屋に侵入し」、その後「岡崎地方を東南進」した。一部は豊橋上空を通過したが、投弾はなく3時30分に警報は解除になつた。

米軍資料によれば、レーダースコープ写真撮影任務の73RMS3、3機、WSM387~389の3機、P-51誘導任務の73NM (Navigation Mission) 2、3機、計5機が出撃したことになる。日誌の警報の対象になつたのは73RMS3 (名古屋) の3機である。一方、この日10時ころには、硫黄島の第7戦闘機集団P-51、50機が厚木飛行場を攻撃したが、B-29、3機がP-51の誘導任務に就いた。日誌の警戒警報の対象になつたのは73RMS3の3機のうちの1機である。

四月二十二日

(173) 丸三日、空襲もなく病人を抱へて大助り。けさ、人に頼むのも気の毒と病人を留守に医者へ葉貫ひに出かけ、楠公祠の前までゆくと警戒警報のサイレンが鳴り出した。丁度午前八時半だ。すぐ引返し合図を打つて組内に知らせると共に監視に当る。情報は津の沖合を東北進中といへば、やがてこちらにくるものと待ち構へると、敵めチグザク航路をとり名古屋を襲ふ様子を見せたり岡崎から南進して伊勢湾に出たりした挙句、渥美半島を東進して南の空に短い尾を曳いて現れた。こやつ東に廻つた所で右に折れ洋上に脱去するらしく九時十分、三重県も愛知県も警報は解除になつた。処がこやつ、のの字形に大きく旋回して南から東寄りの空に現れ、浜松辺りをめざして進んでゐるたがやがて見へなくなつて仕舞つた。かくて九時二十分、伊豆半島の西側を南方洋上に脱去の模様だとして静岡県も続いて警報の解除を見、平常に復した。幸いけふは何処にも投弾した模様もなく先づは結構。

(174) 前の敵一機が脱去して間のない午前十時少し前、近江八幡附近を東進する敵一機ありとて、また警戒警報が発令された。この敵はやがて関ヶ原附近を通過、名古屋に侵入した後、岡崎を経て我が上空へやつて来たと情報はいふが、空ははれても花曇りで本宮山の姿さへ隠される程とて敵機の影など見るべくもない。そのうちに浜松附近を東進中だといへば、我々がマゴマゴしてる間に通過したものと見える。かくて十時二十分、敵が静岡辺にある頃、こちらは警報が解除され、二十五分、沼津附近を東進、東部軍管内へ侵入したので十時三十分、静岡県まで解除された。

(175) 燃料の不足故か昼近くになるとよくやつてくる敵機に備へ十一時に近く、そろそろ昼食の支度にかからうとする矢先、けふ三度目の警戒警報が鳴り出した。前の二度は名ばかりの空襲だし三度目の心で今度こそ大編隊かも知れぬなど軽い気持ちで情報を聞くと、果して志摩半島めざして北上する敵三目標があり、内一つは編隊で他の二つは小数機らしいといふ。十分後には久しぶりで空襲警報のサイレン

第43表：1945年4月20日～24日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻 (マリアナ時間)	出撃時刻 (日本時間)	到着予想時刻 (日本時間)	帰還時刻 (マリアナ時間)	目標 (地域)
4月20日	WSM390	[200027K]	[200427]	[201127]	S201427K	玉島
	WSM391	[200535K]	[200435]	[201135]	S201935K	佐伯市街地
	WSM392	[201020K]	[200920]	[201620]	G210020K	東京
4月21日	WSM393	202305K	202205	210505	G211555K	佐世保ドック
	WSM394	中止			S211952K	沼津飛行場
	3PRM152	210607K	210507	211207	G212015K	九州飛行場-呉
	3PRM153	210605K	210505	211205	G212005K	九州飛行場
	WSM395	[210553K]	[210453]	[211153]	G211953K	大分飛行場
	WSM396	[212350K]	[212250]	[220550]	G221350K	神戸
4月22日	3PRM154	220001K	212301	220601	G221530K	舞鶴-青森
	3PRM155	220204K	220104	220804	G221946K	下関海峡-九州飛行場
	3PRM156	220257K	220157	220857	G221806K	京都-興津
	3PRM157	220252K	220152	220852	G221925K	伊良湖-川崎
	3PRM158	220222K	220122	220822	S221357K	沼津-東京
	WSM397	220623K	220523	221223	G221953K	神戸
	WSM398	220607K	220507	221207	G222110K	大分
	WSM399	222329K	222229	230529	G231250K	大分
4月23日	WSM400	[230625K]	[230525]	[231225]	G232025K	大分飛行場
	WSM401	[230550K]	[230450]	[231150]	G231950K	沼津駅構内
	WSM402	232319K	232219	240519	G241324K	徳山
4月24日	WSM403	[240644K]	[240544]	[241244]	G242044K	佐伯
	WSM404	[240504K]	[240404]	[241104]	G241904K	横浜ドック

注：Kはマリアナ時間を表し、日本時間はKマイナス1時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に7時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は、帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は [] に入れて示してある。

(出所)「作戦要約」より作成。

が鳴り出した。間もなく接岸した敵機は大型四機で北進をつづけ、後続の編隊は小型約四十機だとのこと。小型機なれば性能上滞空時間が短い筈だから来襲範囲も極限されよう。が然しB二十九よりも五月蠅い行動をとるに相違ないと緊張待機した処、どうしたことか大型機は松坂附近、小型機は志摩半島以上に北進することなく旋回をつづけた後、次々に南方洋上に脱去してゆくではないか。勇躍待機したものには張り合いのないこと夥しいが仕方がない。恐らく続航力の関係で内地に深か入が出来ず、そのまま引返したものと思はれるが、或はその試験であったかも知れぬ。そんなことで十一時四十五分、岐阜、静岡二県が先づ空襲警報から解除され五分おいて本県も解除され、続いて正午には警戒警報までが解除され、久しぶりの編隊来襲も結局、竜頭蛇尾に終つた。

【解説】20日、21日と警戒警報の発令がない日が

続いた。妻の病気がどのような状態かは日誌の記述からは明らかではないが、あまり容態が良くないことは伝わってくる。病人を抱えて、毎日のように発令される警戒・空襲警報に対応するのはかなり大変だろうと思う。15日の日誌にあるように「空襲だとしてどうすることも出来ぬ。爆弾でも落ちたらそれ迄と覚悟を極め」るしかなかったであろう。

米軍資料(第43表)によれば、20日には気象観測爆撃機WSM390～392の3機、21日にはWSM393～395(ただし394は中止)の2機、3PRM152～153の2機、計4機が来襲したことになっている。しかし、豊橋地方では警戒警報は発令されなかった。

日誌によれば、22日は、先ず8時30分に警戒警報が発令された。最終的に「渥美半島を東進して南の空に短い尾を曳いて現れた」が、「伊豆半島の西側を南方洋上に脱去」したようで、

9時10分に警報は解除となった。つづいて、10時少し前にこの日2度目の警戒警報が発令された。近江八幡附近を東進して名古屋に侵入後、いつの間にか豊橋上空を通り過ぎた。そして、11時ころ3度目の警戒警報が発令され、10分後には空襲警報に変わった。それまでの様子とは違って、大型機4機の後に小型機40機が続いて志摩半島を旋回し続け、その後、洋上へ抜けた。この小型機は、硫黄島のP-51でB-29が誘導したもので、19日に次ぐ2度目の作戦であった⁸⁾。『朝日新聞』は、「P51四十機来襲 志摩半島の工場、駅等盲爆」と報じている。この作戦については、同じ22日の次の記述に詳しい。

四月二十二日

この地方にこそ敵機の来襲は少なくなつたものの沖縄戦線に対して戦略的だ。また戦術的に帝都に來襲したり九州地方を荒したり敵も仲々忙しらしい。きのうの朝もマリアナからB29が百八十機で來襲し、主として我が航空基地を狙つたが損害は軽微だつたといふ。このマリアナ基地にあるB29の実動可能機数は約四百五十機で、整備に三日を要しても百五十機宛でなら毎日来襲が可能であり、更に硫黄島基地にはP51が已に百機以上進出して来て居るらしいといふからこれにも油断はなりかねる。新聞の報道によれば、硫黄島のP51戦闘機約四十機は、B29若干機に誘導され昨日午前十一時頃から約一時間、東海地区に來襲、三重県下の航空基地、工場などを襲ひ機銃掃射を行つたりなどした外、宇治山田及松坂に少数の爆弾を投下した。これが昨日三日目の空襲の実態で其他やはり昨日の朝マリアナ基地のB29約百機が九州南部に來襲、一部は四国から大分方面に侵入したがそれと同時にグラマン三十機が鹿児島県下に侵入したといふ。

[解説] 22日の2度目の記述は「この地方にこそ敵機の来襲は少なくなつたものの、沖縄戦線に対して戦略的だ」という文で始まっている。こ

の時期には第38-39表(前号、38-41頁)にあるように、連日、九州地域をはじめとする特攻基地となつていた飛行場を爆撃していた。その分、航空機工場や大都市市街地への爆撃頻度は減少したが、19日と22日には硫黄島に進出した第VII戦闘機集団のP-51数十機がB-29数機に誘導されて、19日には厚木飛行場を22日には志摩半島各地に機銃掃射等を加えるという新たな攻撃が開始された。

ところで、米軍資料によれば、22日には気象観測爆撃機WSM396~398の3機、写真偵察機3PRM154~158の5機、計8機が來襲したことになる。日誌にある2度の警戒警報の対象となつたのは3PRM156(京都-興津)、3PRM157(伊良湖-川崎)あたりだろうか。しかし、11時過ぎのB-29に誘導されたP-51の作戦については、「作戦要約」には記載がない。『朝日新聞』は、少数機について「早朝B29一機は四国西部、中国を経て神戸附近数箇所に投弾の後東海軍管区より脱去、また同日午後別の機は紀伊水道から侵入神戸に投弾した」と報じている。

四月二十三日

(176) 朝から曇り日。十一時四十五分警戒警報のサイレンがまた鳴り出した。情報によると敵一機が志摩半島の南岸に到達し依然北上中だといふ。名古屋の上空には友軍機がまち構へて居る。高射砲が手具すね曳ひて居る。それに恐れてか途中針路を東にかへ、渥美半島の南を浜名湖に向ひ、続いて浜松を経、静岡に向つてゐるとして正午この警報も解除を見た。こやつその後も東進をつづけ、正午を過ぐる五分東部軍管内へ侵入したが何処へも投弾した模様もなく、何れ偵察のための來襲と思はれる。

[解説] 23日は11時45分に警戒警報が発令された。米軍資料によれば、WSM399~401の3機が來襲したことになる。警報の対象になつたのはWSM401(沼津駅構内)と考えられる。『朝

8) 『三重の空襲時刻表』は、「伊勢市・松坂・波切・明野飛行場被爆、機銃掃射」「P51、40機襲い死者2負傷14」「神戸製鋼1棟焼け住宅1舟1破壊」としている。P51を艦載機としているのは間違い。

日新聞』は「正午過ぎマリアナ島 B29一機は大分県に侵入，国東半島，四国，松山市を経て午後一時半頃脱去した」と報じるのみであった。

四月二十四日

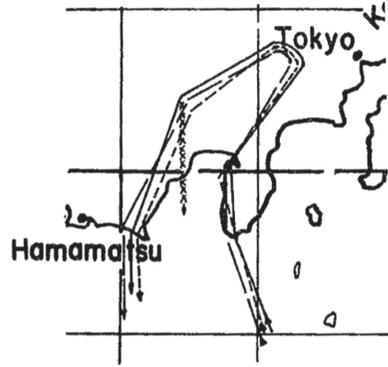
(177) 午前八時十五分，晴れ渡つた大空をゆるがして警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報によると伊豆七島方面から北上する敵約二十一目標があるといふ。沖縄の戦線に呼応して戦略か戦術か知らぬが恐らくマリアナ基地から最大限の出撃であらう。真先きの第一目標が約二十機，第二目標が十一機，第三目標が九機，第四目標が四十機とも三十機ともいい，第五目標二十機だといふ。これらが伊豆半島の南岸に到達すると，暫く旋回しては勢を揃へ西北さして進んでくる。即ち，静岡や浜松が目標になつてゐるらしい。間もなく静岡県下に空襲警報が発令される。いづれこちらにもとぼつちり位ひくるだらうと待ち受ける。

それから約三十分後には，夫等の編隊が次々と静岡附近に侵入して来て附近に投弾し，更に東して帝都に向つてゆく。くるやつくるやつが皆さうだ。そんな風でこちらには襲来の様様なしと見て九時丁度，警戒警報の解除を見た。

其後この敵編隊は次々帝都を襲ひ，引返し静岡を通つて伊豆諸島をめあてに南方へ脱去しつつあるが，帰り道に落し損じた爆弾を静岡市に投下したり，道を間違へて浜松近くまで来て南方へ転ずる敵機もあり癢にさわる事夥しい。我が制空部隊は帰途を擁し蒲原附近で猛烈に邀撃してゐるといふ。どうかうんと叩きつけて貰ひたいものだ。

来襲百二十機 撃墜十三機，撃破三十三機

[解説] 8時15分に警戒警報が発令された。日誌によれば「伊豆七島方面から北上する」120機に対するものであった。「静岡や浜松が目標になつてゐるらしく，「編隊が次々と静岡附近に侵入して来て附近に投弾し更に東して帝都に向つてゆく」。米軍資料（「作戦任務報告書」No.96）によれば，この日，第73，313，314航空団のB-29，計131機が第1目標を日立航空機立川工場，第2目標を静岡市街地として，出撃



第60図：4月24日の作戦任務 N0.96の飛行コース
(出所)「作戦任務報告書」No.96.

した。この命令は，本来は九州の航空基地の爆撃するものであったが，4月24日の九州地域の天候は好ましくなかったため，東京地域への攻撃に変更されたものであった。しかも，出撃部隊の規模に適した目標として日立航空機工場が第1目標に選ばれることになった。

第60図からも明らかなように，飛行コースは伊豆半島から侵入，半島の東側を沿岸に沿って進んで，沼津附近から第1目標に向かい，復路は甲府附近を経て御前岬から洋上に出た。

この作戦では，101機が第1目標を8時52分～9時05分にかけて高度10,000～14,500フィートから500lb一般目的弾M-64，1,894発(437.5トン)を投下した。第2目標の静岡に8機が134発(33.5トン)を投弾した。この他静岡周辺では，臨機の目標として各1機が清水，池新田などを爆撃した。

少数機については，米軍資料(第43表)によれば，WSM402～404の3機が来襲したことになる。『朝日新聞』は「午前十一時頃マリアナ系B29一機は鹿児島県甕島上空に侵入間もなく脱去，別の機は同十一時半頃宮崎東方面から大分県南部豊後水道より山口県萩市を経て同県北方面で旋回反転して大分県国東半島上空に至り午後一時ごろ豊後水道から南方洋上に脱去」と報じた。

四月二十五日

組の警戒用に太鼓が出来てから警戒警報解除にも何か信号したいと考えた末、一つづつ十回打ちを解除として組限りでやつて来た処、本月十五日から県下一般がこれを採用して解除毎に打つことになった。次いで二十日からこれまでの情報の前置きに東海軍管区情報といったのを東海防空情報といふやうに改められた。

そして来月の一日から警戒警報と空襲警報解除がこれ迄三分間のが一分間となり空襲警報の八秒置き四秒十回が五回と短縮され何れも手取早くなった。

四月二十五日

(178) 昼食もとくに済まし一休みしてゐると、正午を過ぎて十分、けふもまた警戒警報のサイレンが鳴り出した。昨日から東風がふき曇り日なので敵機の影など見るべくもない。

情報によると浜名湖南方を東進する敵一機があるといふ。こやつ接岸すると方向を北に転じ秋葉山附近を経て南信伊奈地方に入り、尚北進を続けるので僅か二十分で同三十分、この警報あつけなく解除となる。

[解説] 25日はまず、15日から愛知県の警戒警報解除の信号の打ち方が変更になったこと、20日から警報は陸軍の東海軍管区情報から東海防空情報に変更されたこと、そして5月1日から警報とその解除の信号の短縮されることなどを記している。東海軍管区は2月1日にそれまでの中部軍管区(管轄区域は中部・近畿)から近畿地域を分割して形成され、同司令部は愛知県、岐阜県、静岡県、三重県、石川県、富山県の6件を管轄した。防空法および同施行令にもとづいて、軍管区等⁹⁾は警戒警報、空襲警報の2段階でラジオ、サイレンなどで伝達された。警報の総称として防空警報という語が使用されていた。

この日もまた12時10分に警戒警報が発令され

たが、12時30分には警報解除となった。米軍資料(第44表)によれば、気象観測爆撃機 WSM405~407の3機が来襲したことになっている。警報の対象になったのは WSM406(立川)であろうか。『朝日新聞』には、この時期になると少数機の報道はめっきり減少して、連日、沖縄戦のようすや B-29による九州地域の航空基地の爆撃の記事が掲載されるようになった。

四月二十六日

(179) 朝からの曇りで今にも降り出しさうな午後一時二十五分、警戒警報のサイレンが鳴り出した。情報の初めを聞き漏したので敵機の行動は明かでないが、暫くすると浜名湖北方を東南進中とあつて、僅か十分間で警報は解除された。

[解説] 26日は13時25分に警戒警報が発令されたが、わずか10分で警報は解除となった。米軍資料(第44表)によれば、WSM408~410の3機と3PRM159と170(ただし、中止)の1機である。任務番号が159から160でなく170にとんでいるのは、この間、米第13航空軍の要請で3PRM160~169がジャワ島の偵察任務に就いたためである¹⁰⁾。日誌の警報の対象になったのは WSM409(浜松)であろう。

四月二十八日

(180) 二十四日に百二十機で関東、殊に立川地方を襲撃して来た敵は、其後、二十五日を休んだだけで二十六日払暁百十機、二十七日朝百五十機で南九州に襲来して居るが、この地方としては、たまに一機づつの侵入を見る程度で、全く御留守の形ちとはいへ、少数たりとも油断はならぬ。けさも九時四十五分、折柄の晴れ渡る春の大空をゆさぶつて警戒警報のサイレンが鳴り出した。そのころ志摩半島をめざし北進して来た敵一機は、宇治山田市の附近を北進中だといふ。この敵、同四十六分、津の附近を北進、同五十一分、鈴鹿峠付近を東北進、同五十二

9) 海軍では各鎮守府や警備府が警報を発令した。

10) 工藤洋三(2011), 178頁。

第44表：1945年4月25日～30日の気象観測爆撃機および写真偵察機

月日	作戦	出撃時刻 (マリアナ時間)	出撃時刻 (日本時間)	到着予想時刻 (日本時間)	帰還時刻 (マリアナ時間)	目標 (地域)
4月25日	WSM405	[250030K]	[242330]	[250630]	G251430K	済州島
	WSM406	[250650K]	[250550]	[251250]	G252050K	立川
	WSM407	[250615K]	[250515]	[251215]	G252015K	玉島
4月26日	WSM408	260135K	260035	260735	G261707K	宇部曹達工場
	3PRM159	[260105K]	[260005]	[260705]	G261505K	九州の飛行場
	3PRM170	中止			G261146K	九州の飛行場
	WSM409	[260715K]	[260615]	[261315]	G262115K	浜松
	WSM410	[260737K]	[260637]	[261337]	G262137K	済州島
4月27日	WSM411	262326K	262226	270526	G271704K	大島石油備蓄地
	3PRM171	270335K	270235	270935	G271950K	九州の飛行場
	WSM412	270638K	270538	271238	G272100K	神戸
	WSM413	270602K	270502	271202	S271941K	済州島
4月28日	WSM414	272323K	272223	280523	G281301K	佐賀閔精錬所
	WSM415	[280457K]	[280357]	[281057]	G281857K	東京
	WSM416	[280644K]	[280544]	[281244]	S282044K	宮崎飛行場
	WSM417	282256K	282156	280444	G291152K	済州島
	3PRM172	中止			G281453K	九州の飛行場
	3PRM173	280250K	280150	280850	G281755K	九州
	3PRM174	280239K	280139	280839	G281526K	東京 - 名古屋
4月29日	WSM418	290635K	290535	291239	G292250K	和歌山
	WSM419	[290505K]	[290405]	[291105]	G291905K	立川航空機工廠
	WSM420	292300K	292200	300500	G301400K	呉海軍基地
	3PRM175	[290251K]	[290551]	[291251]	G291651K	東京
	3PRM176	[290626K]	[290526]	[291226]	G292000K	名古屋 - 京都 - 呉 - 岡山
	3PRM177	[282126K]	[282026]	[290326]	G291126K	東京
	3PRM178	[290450K]	[290350]	[291050]	G291850K	名古屋 - 大阪
	3PRM179	中止			G300445K	九州の飛行場
4月30日	3PRM180	300215K	300115	300815	G301655K	九州の飛行場
	3PRM181	300159K	300059	300759	G301935K	立川 - 横須賀他
	3PRM182	300425K	300325	301025	G301835K	立川 - 東京の工廠
	WSM421	[300617K]	[300517]	[301217]	G302017K	枕崎飛行場
	WSM422	[300605K]	[300505]	[301205]	G302005K	神戸

注：Kはマリアナ時間を表し、日本時間はK マイナス1時間である。日本到着予想時刻は出撃時刻に7時間をプラスしている。元資料に出撃時刻の記載がない場合は、帰還時刻からB-29の平均的な往復時間である14時間をマイナスして出撃時刻を推定した。その場合は [] に入れて示してある。

(出所)「作戦要約」より作成。

分、四日市附近東北進、五十七分、名古屋に侵入した後、東進、十時一分、瀬戸附近東進し、三重、岐阜県下に警報の解除を見たが、その代り静岡県下に警戒警報の発令を見た。十時四分、敵は瀬戸附近で旋回西進の様相があり、岐阜県に注意が与えられると共に、三重県に警報の発令を見た。十時六分、敵は岐阜の北方を西進、十時十分、関ヶ原の東方を西進したが、その二分後には方向を換へ、名古屋へ再侵入して来た。これに対し、友軍機が攻撃中との情報はあつたが功を奏するに至らず、十四分には瀬戸附近を東進、十六分、足助附近を南東進、二十分、

鳳来寺山付近東南進、静岡県に入つたので、三重県の警報解除せられ、十時二十一分、秋葉山附近を東進中だとして本県の警報も解除された。かくてこの敵は、二十六分、静岡附近を、二十八分、富士川口附近を東進、関東地方へ侵入したので静岡県また警報の解除を見た。

「解説」日誌にもあるように、27日にもB-29の大規模作戦が実施され南九州の航空基地に爆撃を加えた。本稿ではこれらの作戦についてはいちいち言及しないが、既述のように沖縄支援作戦

として連日のように行われていた。

27日の少数機については、豊橋地方には警戒警報は発令されなかったが、米軍資料（第44表）によれば、気象観測爆撃機 WSM411～413 の3機、写真偵察機3PRM171, 1機、計4機が来襲したことになる。

28日は、日誌によれば9時45分に警戒警報が発令された。志摩半島を北進、その後、東北進して名古屋に侵入、さらに静岡方面へ進んだ。この機は瀬戸付近で旋回して名古屋へ再侵入したが、再び東進した。その結果、10時20分に警戒警報は解除された。

米軍資料（第44表）によれば、この日は気象観測爆撃機 WSM414～417の4機、写真偵察機3PRM175～179（ただし、172は中止）の4機、計8機が来襲したことになる。日誌の警戒の対象になったのは WSM415（東京）または3PRM174（東京－名古屋）のいずれかであろう。『朝日新聞』は、九州航空基地の爆撃の一方で「天草方面および大分県下に各一機が侵入し、その一機は大分県下の沖合で漁船に対し超低空から銃撃を加えた」と報じたのみである。

四月二十九日

(181) 午前十時三十分、町の用事で他家にあつて警戒警報の発令を聞いた。急いで帰宅。徐々に聞く情報で侵入の敵は二機。其内一機が四日市附近を東進中だといふ。間もなくこの敵機は知多半島の上空を経て市の南方に現はれやがて東南さして洋上に出て脱去するらしい。姿は見えないが曳いた飛行雲が弧を描いて居る。他の一機は鈴鹿峠から東進名古屋を経て鳳来寺山、浜名湖北方、秋葉山、静岡を経て関東地区へ侵入したので十一時警戒警報の解除を見た。

[解説] 29日は10時30分に警戒警報が発令された。来襲機は2機で、1機は四日市附近を東進し知多半島を経て洋上へ、他の1機は名古屋を経て東進し関東地区へ侵入した。その結果、11時に警戒解除となった。米軍資料（第44表）によれば、WSM418～419の2機、3PRM175～179（ただし、179は中止）の4機、計6機が来襲したことになる。日誌の警戒警戒の対象になったのは、WSM419（立川航空工廠）であろうか。

『朝日新聞』は、少数機についてめずらしく詳細な記事を掲載し、「廿九日九州地区に來襲したB29の内一機は午前九時過ぎ九州から東進、萩附近から岡山方面へ東南進し同十時神戸を経て京都北方に至りまた別の機は九時頃高知西方から侵入、尾ノ道、阪神地区などを経て十時半頃二機とも東海軍管区に進出したが何れも投弾なし、また午前八時半頃四国西南端附近へPB4Y一機が超低空で侵入、約三十分間に互つて西南洋上を旋回、東方洋上に脱去、さらに午後一時過ぎB29一機は紀伊水道を北上、明石から裏日本に向け反転して再び本土を横断南下し、午後二時紀伊半島の西岸から南方洋上に脱去、帰途和歌山附近に投弾した」と報じた。

四月三十日
(182) 午前市役所に出頭、空腹を感じたので十一時にはまだ少しのある頃昼食の箸をとりつつあるとき、南方に当つて敵機らしい急降下音に続いて連続数十発の炸裂音に戸硝子がこの辺でもガタつく。箸を置いて外に出て見ると南方に当つて黒煙濛々。果して出し抜けに敵機がやつて来て爆弾を投下したのだつた。天は晴れて居るが天候の工合で敵機の影は見られないし警戒も情報も一切出てゐない。全くの不意打ちだ。四月十五日小池へ投弾した時と同様、天候を利用し発動機を止めてでも侵入したものと見へる。空襲警戒が発令されたのはそれより約五分もたつてからの十一時三十分頃。情報によると豊橋上空に敵大型四機が旋回中だといふ。其後も一二回爆弾の炸裂らしい音が聞へるのでまだ上空に敵機が居るらしい。

四月三十日

十時五十二分、豊橋地方を襲うた敵四機が逐次南方へ脱去中だといふ。十一時二十分、空襲警戒解除され続いて十分後には警戒警戒も解除を見た。投弾されたのは何処であらう。高師方面らしくもあるが向山附近だといふ人もある黒煙りが其後も昇つ

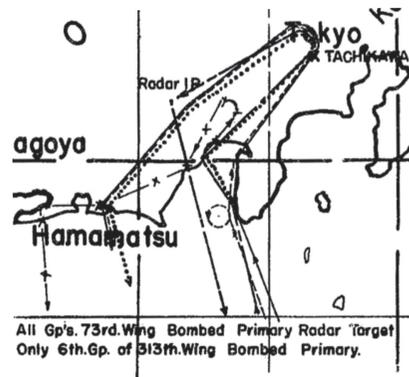
て居る処を見ると、火災が発生したかとも思はれるが昼間のこと故大したことはない。

[解説] 30日は、10時52分いきなり「敵機らしい急降下音に続いて連続数十発の炸裂音に戸硝子がこの辺でもガタつく」「外に出て見ると南方に当つて黒煙濛々」といった状況であった。警戒警報は発令されておらず、「空襲警報が発令されたのはそれより約五分もたつてからの十一時三十分頃」で、空襲警報は11時20分、警戒警報は同30分に解除された。

実はこの日、第 XXI 爆撃機集団の作戦任務 No.126 (第61図) が実施され、第73, 313, 314 航空団の106機が立川陸軍航空工廠を第1目標、浜松の日本楽器製造を第2目標、浜松市街地をレーダー第1目標として出撃した。立川陸軍航空工廠は、陸軍の主要な航空工廠で、機体やエンジンの生産などを行っていた。日本楽器は、尼崎の住友金属工場のプロペラ製造所と並ぶ2大プロペラメーカーの一つであった¹¹⁾。

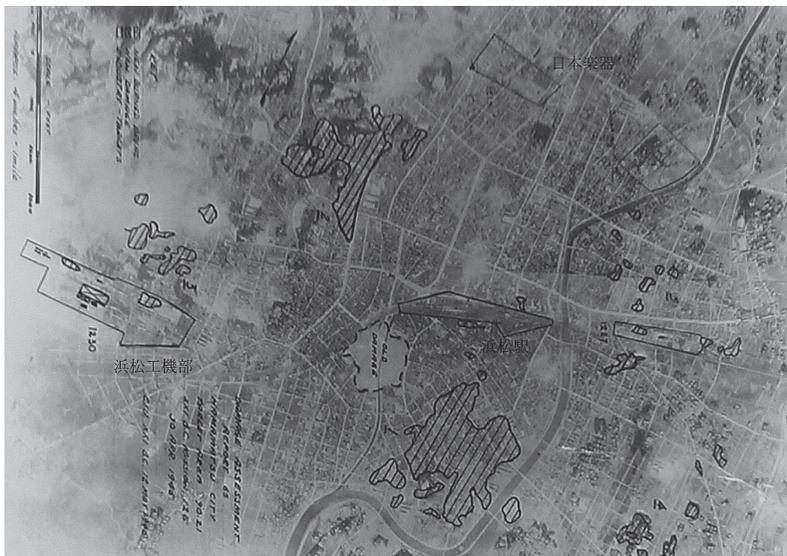
飛行コースは、伊豆半島先端から二方向に分かれて目標に向かったが、目標上空は雲量10分

の10であったため、大半の機はそこから左に旋回し、富士山上空を通過して浜松方面へ向かった。この結果、第1目標を爆撃できたのは7機で、第2目標の日本楽器を爆撃したのは9機、レーダー第1目標の浜松市街地は55機であった。この他、浜松地域では8機が臨機目標として浜松飛行場を爆撃した。また、5機が同じく臨機目標として豊橋市に投弾した。投下時刻は



第61図：4月30日の作戦任務 No.126の飛行コース

(出所)「作戦任務報告書」No.126.



第62図：4月30日の浜松地域の焼失図（斜線部）

(出所)「作戦任務報告書」No.126.

11) この空襲については、拙稿「1945年4月30日と5月19日の浜松空襲」『空襲通信』第10号、2008年を参照されたい。

日本時間の10時22分～10時54分、高度は17,800～21,500フィートであった。浜松地域に投下された爆弾のうち、浜松市街地に500lb一般目的の弾、M-64, 1,655発(406トン)、同じく日本楽器に179発(45トン)、浜松飛行場に104発(26トン)などを投下した。

浜松への投弾は広範囲に分散したが、浜松駅の南側と北側にそれぞれ広範囲な焼失地域(斜線で囲まれた部分)(第62図)が見られる。この爆撃で浜松地域では885人の死者を出し、全焼・全壊家屋3,488戸であった¹²⁾。

豊橋を爆撃したのは第313航空団隷下の504爆撃群団の5機であった。その飛行コースは、第61図の—×—のラインで示される。この5機は伊豆半島の先端を通過後、駿河湾を横断して静岡の東から上陸するものの、途中から左旋回して、第1目標に向かわず西進して豊橋方面へ向かい渥美半島から洋上に抜けた。この時、豊橋市に投下されたのは「日本本土爆撃詳報¹³⁾」によれば、M-64, 81発(24トン)、『豊橋市戦災復興史』によれば、着弾地点は山田町と南栄町で8人の死者を出した。実は、この作戦には4機のP-51が護衛についたようである¹⁴⁾。『朝日新聞』は、「P51は平塚、厚木に攻撃を加え相模湾から脱去」(1945年5月1日付)と報じている。同日の少数機については米軍資料(第44表)によれば、3PRM180～182の3機、WSM421～422の2機、計5機が来襲したことになっている。

なお、B-29の4月30日の爆撃について日誌は5月1日付で次のように記している。

五月一日

昨日出し抜けの空襲につきその被害の模様など一切発表されないで、同じ市内に居ながら道聴塗説の範囲を出てないが、敵機は午前中から関東地方に侵入して居り、その帰途をこちらに紛れこんだ奴のし



第63図：陸軍教導学校とその周辺の地図

(出所)『最新豊橋市街地図』1939年より。

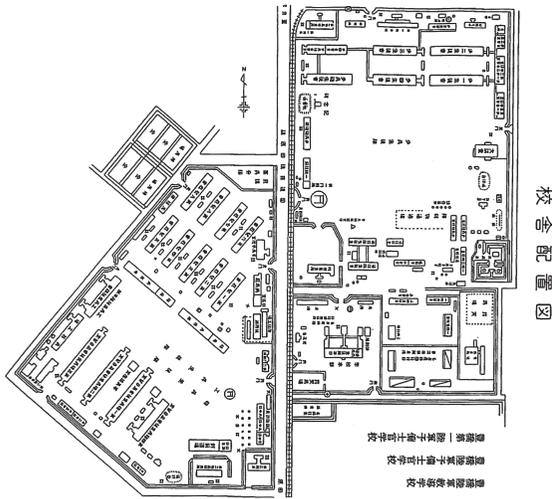
わざで炸裂の瞬間、高師だなど思つた通り、被害現場は予備士官学校から兵器補給廠を狙ひ、六七十発の爆弾を投下したといふ。この方面で関係者は福岡学校に義弟の兵衛が居り、士官学校に経済係の今井君、補給廠に組の中村君が居る筈なので、所々聞き合せた処、三人とも無事なことが分り、先づ先づ一安心といふ処。それに昨日は靖国陣社の春季大祭で、各部隊は陸軍墓地に参拝、業を休んでいたのでここにも不意をつかれた様のはつきり見へる。然し、投弾の多かった割に損害は至つて少なく、士官学校の砲兵隊の豊秋葉神社の傍に落下したやつで、兵四人即死、九人負傷。学校本部と補給廠との間の道路へも一発落ち、附近の硝子を粉碎した。また、騎兵隊だつた方の補給廠倉庫にも落ち、多少の損害があつたが、勤労奉仕の学童に被害なく、補充馬廠にも落ちたとの噂あり(第63図参照)、小松、北山など接近した地方にも被害があつたらしい様子だが詳しいことは分らない。

[解説] 日誌によると「道聴塗説の範囲を出てない」としながらも、「被害現場は予備士官学校から兵器補給廠」で「六七十発の爆弾を投下した」としている。士官学校とは、豊橋第一陸軍予備士官学校のことである。1939年に現愛知大学にあった豊橋陸軍教導学校内に豊橋陸軍士官学校が設置されたが、翌年、教導学校は同市西

12) 浜松空襲・戦災を記録する会(1973)『浜松大空襲』290～292頁。

13) 『東京大空襲・戦災史』第3巻。

14) 「作戦任務報告書」No.126に添付の野戦命令書参照。



第64図：豊橋陸軍教導学校校舎配置図

(出所) 高士会『嗚呼、豊橋』1995年より。

口町に移転した。1943年、教導学校が廃止されると、その跡地に豊橋陸軍第二予備士官学校が設立され、従来の町畑町の豊橋校は豊橋第一陸軍予備士官学校に改称した。

この地域には日誌の筆者の関係者もいたが全員無事であった。しかし、詳しいことはわからないとしながらも「士官学校の砲兵隊の豊秋津神社の傍」「学校本部と補給廠との間の道路」「騎兵隊だつた方の補給廠倉庫」「補充馬廠」「小松、北山など接近した地方」などが被弾したようである¹⁵⁾。

第64図の地図は、1939年の陸軍教導学校時代のものである。「豊秋津神社¹⁶⁾」は、現愛知大学豊橋校舎の副門に入ってすぐの松の木のあるこんもりとした場所、「砲兵隊」とは隣接する地図上の陸軍教導学校砲兵学生隊と考えられる。「学校本部」は現在の愛知大学構内旧本館、地図では陸軍教導学校本部で、「補給廠」は地図の兵器部出張所および火薬庫（旧兵器廠）辺

りである。「補給廠倉庫」は地図の陸軍倉庫、「補充馬廠」は地図の左下に見える。さらに「北山」は地図の右下の小松町の南側にある。日誌によれば、現在の副門辺りで兵四人が即死、九人が負傷した。

名古屋空襲を記録する会（1985）によれば、投下弾数70、被害地域は豊橋市福岡校区南部一円、予備士官学校付近で、死者15人としている。また、太田幸一（2007）『豊橋軍事史叢話（上巻）』は、「B29豊橋市山田町、南栄町に投弾、罹災世帯43（死者8人）。この時豊橋第一陸軍予備士官学校にも投弾、一個分隊全滅」と記している。

参考までに第一予備士官学校時の校舎配置図（第64図）を示す。1939年の地図と比較すると、営内の歩兵学生隊は歩兵生徒隊、砲兵学生隊は第1号から9号までの厩舎、騎兵学生隊は第1から第4までの砲兵生徒隊舎及自習室となっている。また、陸軍教導学校本部は、歩兵砲兵生徒隊本部などになっている。

従来、4月30日の豊橋第一陸軍予備士官学校構内およびその周辺への爆撃、とくに、同構内への爆撃についてはほとんど言及されてこなかった。今後、更なる資料の発掘が望まれる。

＜次号につづく＞

15) 山田武磨は、4月30日「午前、砲廠にて砲身手入中、突如爆弾落下。一緒に居た小泉候補生は破片による創傷で入院」、5月3日「今朝馬運動中、北山付近で先日爆撃された弾痕の大穴数ヶ所を見て、時局の逼迫を実感す」と記している（高士会 [1995] 『嗚呼、豊橋』108頁）。

16) 1927年7月1日創立の豊橋陸軍教導学校の営内神社として1927年9月1日に建てられた。皇大神宮および明治神宮を主神とする。1929年に開校記念式典挙行に際して豊秋津神社とした。1932年には戦病死者を合祀した。（本康宏史 [2008] 「営内神社と地域社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第147集、287～288頁）。